ヒマラヤ学誌　*No.16, 234-244, 2015*

# 日本人とチベット
## ―河口慧海のチベット旅行を中心として―

奥山直司

高野山大学文学部

### はじめに

日本人がチベットと本格的な関わりを持つのは、日本が近代化の道を歩みはじめて以降のことである。1887（明治 20）年前後から、日本仏教界には「入蔵熱」（チベット入国フィーバー）が起こり、何人もの有為の仏教徒が、ヒマラヤ山脈からチベット高原にかけて果てしなく広がる「未知の土地（テラ・インコグニタ）」の探検に名乗りを上げた。

当時のチベットは、外国、特に英国に対する警戒心から国を閉ざし、外国人の立ち入りを厳しく制限していた。そのためその内情は外の世界には殆ど知られず、チベットは「禁断の国」、「神秘の国」と見做されていた。それだけにこの国は、世界中の探検家、冒険旅行家、学者、調査員、さらには宗教家、夢想家などの関心を引き付けた。そして 19 世紀末の日本では、この関心が仏教徒の間の入蔵熱となって表れたのである。彼らにとってチベット探検は、西洋の東洋学者たちが唱える大乗非仏説論（大乗仏教は釈迦牟尼の説いた教えではなく、後世の創作物であるという説）への反証の意図を含む仏教の源流の探究、アジアの他の仏教徒との連合、キリスト教に対抗した仏教の世界布教など、明治仏教界に課せられた様々な課題の解決を目指す動きの一部であった。

かくして入蔵を志した日本人の中で最初に「禁断の都」ラサに到達した人物が、黄檗僧河口慧海（1866-1945、図 1）である。彼が最初のチベット旅行の一部始終を語った『西蔵（チベット）旅行記』（初版：博文館、1904 年）は、様々な版を産み出し、また英語版（*Three Years in Tibet,* 初版：Madras, 1909）を皮切りに各国語に翻訳されて、日本だけでなく世界中で、ヒマラヤ・チベット、あるいは探検・冒険一般に関心を持つ人々の間で読み継がれてきた。

本稿では、彼の足跡を日本からヒマラヤ･チベットへと辿りながら、日本・チベット関係の原点ともいうべき彼の探検行に秘められた志などについて考えてゆきたい。なお巻末に慧海が弟河口半瑞（1876-1946）に宛てた書簡 1 通を附載した。

### 河口慧海とは何者か

東京都世田谷区奥沢にある九品仏浄真寺の境内の一画に「河口慧海師碑」（1957 年建立）が立っている。浄土宗の仏教学者椎尾辨匡（しいおべんきょう）（1876-1971）の撰になるその碑文の冒頭には次のように刻まれている。

> 我国最初のヒマラヤ踏破者　日本西蔵学の始祖
> 在家仏教の首唱者

これは慧海一代の事績を述べたものとして簡にして要を得ている。最初の「我国最初のヒマラヤ踏破者」とは、探検旅行者としての彼の顔である。「日本西蔵学の始祖」とは、仏教学者・チベット学者としての顔である。そして「在家仏教の首唱者」とは、彼の宗教家としての顔を代表している。この旅行者、学者、宗教家という 3 つの顔は有機的な関係で結ばれており、いわば三角形の 3 つの頂点として、河口慧海という 1 個のパーソナリティを形作っている（図 2）。

すなわち、宗教家であるということが旅行者としての彼に動機とエネルギーを与える。具体的に言えば、本当の仏教を明らかにしたいという情熱が、チベットという当時の一般の日本人には想像もつかない異世界に向かって彼を旅立たせ、仏に守られてあるという信念が、彼にヒマラヤ･チベットでの幾多の危難を乗り越えさせた。逆に、探検旅行を進めることが宗教家としての彼を鍛え、成

長させる。実際、彼はチベット旅行自体を仏道修行の一環と捉えていた。旅行者としての彼と学者としての彼、学者としての彼と宗教家としての彼も、これと同様の関係にある。

無論このような形が最初から出来上がっていたわけではない。慧海は明治の仏教運動の中から頭角を現し、行動的な青年僧として黄檗宗内の改革に奔走し、その後長期のチベット旅行を敢行し、帰国後は布教・啓蒙活動のかたわら仏典研究に明け暮れ､その結果ついには還俗してウパーサカ（在家）仏教を提唱するに至る。この波瀾に満ちた人生行路の中で、旅行者、学者、宗教家の三角形は徐々にその形を整えてゆく。そしてそれは彼が数え年 80 歳（以下、年齢はすべて数え年）で没するまで成長を続け、おそらくは未完に終わった。仏ならぬ身に真の意味での完成はないからである。

いずれにせよ、この三角形の形成に決定的な役割を果たしたのはチベット旅行、より正確に言えば、インド・ネパール・チベット旅行であった。それは、1 年 5 ヵ月の帰国期を挟んで前後 2 回、通算 17 年にもなんなんとする長い旅であった。

以上、浄真寺の碑文の表現を手がかりに、慧海とは大雑把に言ってどのような人物であるかを考えてみた。以下では、改めて彼の生涯を時間軸に沿って見てゆきたい。

## 故郷「堺」北旅籠町

慧海は 1866（慶応 2）年、和泉国堺（現大阪府堺市）の北旅籠町に樽職人の長男として生を受けた。幼名は定治郎という。かつて会合衆と呼ばれる豪商たちが自治を行っていた富裕な商業都市堺は、鉄砲鍛冶に代表される優秀な職人衆の文化を育んだ町でもあった。慧海がこのような堺のもの作りの伝統の中から現れたことは、彼の人間を考える上でとりわけ重要なことのように思われる。

定治郎は 6 歳で同じ町内にある清学院という山伏寺が経営する寺子屋に入って、読み書き算盤を習った。翌年には学制の発布によって新設された小学校（現堺市立錦西小学校）に入学する。彼は読書が好きな向学心の強い少年であった。小学校自体は 12 歳の時に父親の意向で退学するが、2 年ほど家業の修得に専念した後は、家業を手伝うかたわら、夜学や塾に通って勉学を続けた。

その彼が仏道に志したきっかけは、1880（明治 13）年、15 歳の時に釈迦牟尼（ブッダ）の伝記を読んだことにあるとされる。この本は、おそらくは浪華の戯作者好華堂野亭編の『釈迦御一代記図会』（1845 年初刊、図 3）のような、釈迦牟尼の生涯を題材にした通俗的な読み物であったと考えられる。もともと彼の両親は信心深かったようであるが、彼のその後の人生を決定づけたのはこの読書体験であった。彼は、釈迦牟尼の大慈悲心に感動し、自らも僧侶となることを願うようになる。そして自分を試すために、「禁食肉・禁酒・不淫」の 3 条の実行を河口家が信仰する信貴山の毘沙門天にかけて誓った。

彼はこの 3 条を、一時期を除いて生涯実行することになる。また後には正午から翌朝まで食事をしない非時食戒の実行もこれに加えた。驚くべきことに、彼はこれらの戒をチベット旅行中も守り通す。自らに課した規律を鉄の意志で実行してゆく。これが仏教者としての彼の出発点であった。しかし定治郎に家業を継がせようと考えていた親たちは、彼の出家を許そうとはしなかった。そのため彼は、在俗のまま大阪の黄檗宗瑞龍寺（鉄眼寺）・正徳寺で修行に励んだ。

定治郎が仏教に出会った 1880 年、彼にもう 1 つの重要な出会いがあったことが最近の研究によって明らかにされている。それは、北旅籠町内の素封家肥下家に養子に入った駒次郎、後の肥下徳十郎（1866-1915）との出会いである。後年慧海は、少年の日の徳十郎との交友を次のように振り返っている（奥山 2014a: 20-21;2014b:8-9, 47［括弧内引用者］）。

> 明治 13 年、居士（徳十郎）の此家（肥下家）に嗣子たるや､先々代徳十郎氏（徳十郎の義父）、居士に許すに余と朋友たることを以てす。其後土屋鳳洲先生の門（堺の漢学塾晩晴書院）に通学することとなり、風雪の晨、降雨の夕、其行路を共にし、其講学する所を論じ、研鑽を共にせしのみならず、又袖を連ねて大和川の橋上に夕月を賞し、住吉の池畔に暁蓮を観て、苦楽をともにすること多年、友情日を逐ひ年を重ねて深きを増したりき。

二人の友情は、後述のように定治郎が念願の出

家を果たして慧海となってからは、出家者と外護者（仏法を擁護する在家者）との関係となって続いていった。チベット旅行に於いても、徳十郎は、地元堺から慧海を物心両面で支える最も頼りになる後援者となる。このような友がいてくれたからこそ、慧海はチベット行に命を懸けることができたのである（図 4）。

## チベット行の決意

1888（明治 21）年、定治郎は 23 歳で上京し、本所緑町にあった黄檗宗羅漢寺（現在は目黒にある）に寄宿して、井上円了（1858-1919）の哲学館（現東洋大学）に通い始めた。1 日 8 時間近いアルバイトで学費と生活費のすべてを稼ぎ出す苦学生であった。

上京から 2 年後、彼はようやく両親の許しを得て、羅漢寺で得度し、念願の出家を果たして、慧海仁広の名を与えられた。河口慧海の誕生である。翌年彼は縁あってこの寺の住職となるが、まもなく僧籍を返上して、黄檗宗の内紛の渦中に飛び込み、数年間、大阪の黄檗宗妙徳寺や京都宇治にある黄檗宗の大本山萬福寺などで宗門の改革に奔走した。彼がチベット行を決意したのは、その間のことである。

かねて慧海には、分かりやすく正確な和訳の一切蔵経（大蔵経、一切経、仏典の一大集成）を造って、日本国民の大安心（安心とは心が安らぎ動揺しない境地）の基としたいという志があった。そのためには、仏教の原点である釈迦牟尼の真実の教えを明らかにしなければならない。ところが、その目的で黄檗版（鉄眼版）一切蔵経所収の漢訳経典を読んでみると、その文言が訳本の違いによって肝心な箇所で必ずしも一致しない。これは彼にとっては大問題であった。漢訳諸本を読み比べているだけでは、そのどれが釈迦牟尼の真実の教えかを判断することは困難だからである。この問題の解決策として彼が思いついたのが、梵語（サンスクリット）で書かれた大乗仏典の原典と、漢訳よりも正確とされるチベット語訳を自ら手に入れて、それらの研究によって釈迦牟尼の真実の教えに迫るという方法であった。

彼にこのような発想ができた背景には、当時ヨーロッパで盛んだったインド学の研究成果と方法論がわが国にも移入され始めていたこと、またこれに刺激されて、その数年前から日本仏教界の一部で本稿冒頭に述べた入蔵熱が起こっていたことが挙げられる。

こうして梵語・チベット語の修得と、それらの言語で書かれた経典の取得を目指す「明治の三蔵法師」の旅が始まる。

## 第1回チベット旅行

1897（明治 30）年 6 月 26 日、慧海は神戸港からチベットを目指す最初の旅に出発した。国家や教団など大きな組織からは何一つ支援のない、求法の情熱と肥下徳十郎を始めとする数人の支援者だけに支えられた、たった一人の旅であった（図 5）。

インドのカルカッタ（現コルカタ）に上陸した彼は、ヒマラヤのヒル・ステーション（植民地の山岳地帯に避暑を目的に建設された西洋風の小都会）、ダージリンに赴き、そこでチベット学者サラット・チャンドラ・ダース（1849-1917）の庇護を受けながらチベット語を学んだ。そのかたわら入蔵経路を調べたが、この方面からチベットに至る道にはすべてチベット兵が配置されていることが分かる。

そこで彼は、別ルートを探すために、中国人巡礼と称して、まずネパールに潜入した。おそらく日本人初のことである。そしてカトマンズ盆地のボダナート大仏塔に滞在しながら、参詣にやってくるチベット人巡礼たちからヒマラヤの間道に関する情報を集めた。彼の卓越した才能の一つは情報を収集し分析する能力にあった。さらに言えば、強い信念と楽天的な性格、緻密な計画性とその計画を実行してゆく意志の強さ、用心深さと電光石火の行動力、語学力など、探検家に必要とされる様々な資質を彼は兼ね備えていた。それが彼を成功へと導いてゆく。

ボダナートでの情報収集の結果、慧海は、ネパール中西部のロー州（現ムスタン）のカリ・ガンダキ河上流の峠からであれば、誰にもチェックされずにチベットに入ることができると判断し、1899 年 3 月に西に向かった。ところがカリ・ガンダキ峡谷のトゥクチェ村まで来たところで、最近ロー州からチベットに入る間道にチベット兵が配置されたため、不審者は誰も通れなくなっていることを知る。そこで、偶々トゥクチェで知り合いになっ



図１　チベット服を着た河口慧海。1913 年 11 月 16 日にダージリンで撮影。（肥下家所蔵、堺市文化財課写真提供）

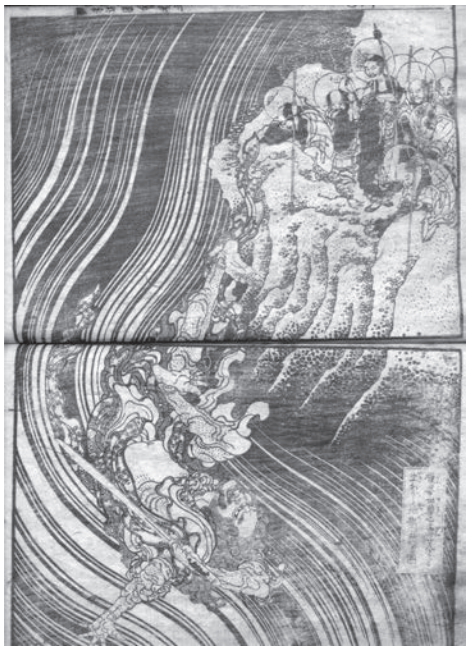


図３　『釈迦御一代記図会』の挿絵の一つ。（高野山大学図書館所蔵）

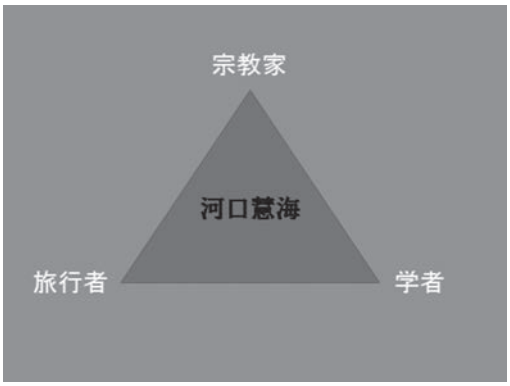



図２　河口慧海の３つの顔



図４　慧海が徳十郎に送った書簡、日記帳、写真、徳十郎の四十九日法要で慧海が読んだ弔文など。（肥下家所蔵、堺市文化財課写真提供）




図５　『西蔵旅行記』初版に付された第１回旅行の経路図。

たモンゴル人のラマに同道して、彼の住む上流の村ツァーランまで行き、村長宅の仏堂に仮寓して、ラマにチベット語とチベット仏教を学びながら、チベットに入る方法を探った。そして彼は、ロー州の西隣りに広がる大山岳地帯、トルボ地方に入れば、チベットの西北原（チャンタン高原）に出られる道筋があるとの情報をつかむ。

1900（明治33）年3月、彼は10ヵ月を過ごしたツァーランを去り、ひとまず下流のマルパ（マルファ）村まで戻った。そして村長アダム・ナリン宅で経典を読みながら、峠の雪が溶けてチベットへの通行が可能になる季節を待った。同年6月12日、彼は案内人兼荷物持ち一人を連れてマルパを出立、6月20日にツァルカ村に着いた。

## ヒマラヤ日記の出現

長きに亘って、慧海がツァルカ村以降、トルボ地方の何処をどう通ってネパールからチベットに入ったのかは、彼のチベット旅行を巡る大きな謎であった。というのも、彼自身が『西蔵旅行記』（第17回）の中では、ツァルカを発ってから7月4日に国境の峠に立つまでの行程を短く漠然としか報告せず、具体的なことは殆ど何も語らなかったからである。それは何故なのか。

考えなければならないのは、これが国境の抜け道という国家機密に関わっているということである。折からヒマラヤ・チベットはグレート・ゲームと呼ばれる英露のスパイ合戦の主要な舞台の1つであった。越境ルートの情報を不用意に漏らせば、ネパール政府に、あるいはまた慧海の通過に何らかの協力をしたムスタン・トルボの人々に迷惑を及ぼしかねない。このような配慮から、慧海はこのルートを詳述することを意識的に避けたと考えられる。

1992年にトルボが外国人トレッカーに再開放されると、現地を訪れ、慧海というヒマラヤ登山の大先達が残した謎に挑戦する日本人登山家が相次いだ。トルボとチベットを分ける分水嶺上には海抜5000 mを超える峠が10以上並んでいる。慧海が越えた峠はそのうちのどれかである筈である。様々な説が出されたが、そのどれもが確証を欠いたものであった。

このような状況に劇的な変化が訪れるのは、2004年に慧海の姪宮田恵美氏宅で慧海の1900年5月から1901年12月までの日記（図6）が発見され、そのコピーが宮田氏のご厚意で筆者を含む研究者・登山家に提供されてからである。この日記を研究するために河口慧海研究プロジェクト（座長・川喜田二郎）が結成され、日記の翻刻・研究を進めるかたわら、シンポジウム、現地調査などを行った。その成果は、「河口慧海の道」（河口慧海研究プロジェクト2007）、『河口慧海日記―ヒマラヤ・チベットの旅―』（奥山編2007）などにまとめられている。これらによって彼の越境ルートがほぼ明らかになった（図7）。

慧海が国境の峠に到達したのは、1900年7月4日のことである。日記の分析から、その峠は大西保ら大阪山の会が主張していたクン・ラ（5411 m、図8、9）であることが確認されている。

彼のヒマラヤ越えの全行程を俯瞰すれば、ヒマラヤ山脈に沿って西へ西へと大きく回り道をしていることが分かる。この大迂回がヒマラヤ突破のまさにブレイクスルーとなったのである。

## ラサ到着からチベット脱出へ

こうしてチベット潜入に成功した慧海は、まずラサとは反対の西北に向かい、数々の危難を乗り越えて、西チベットの聖山カイラース（カン・ティセ、カン・リンポチェ、6638 m、図10）とその周辺の聖地を巡礼した。次いで東に針路を転じ、翌年3月21日、ついに宿願の地ラサに辿り着いた。日本を出てから3年9ヵ月が過ぎようとしていた。

彼は西北原出身者と称してセラ寺に入学し修学に励んだ（図11）。また思いがけず医者として名声を博し、その縁でダライ・ラマ13世（1876-1933）にも拝謁している。しかし、滞在1年あまりで日本人であることが露見し、間一髪ラサを退去。本街道を南に逃げて5つの関所を巧みに通過し、無事ダージリンまで戻った。その後、セラ寺の教師・保証人、彼がインドに手紙を出すのに協力していた商人夫婦など親交のあったチベット人たちが「英国の秘密探偵」（『西蔵旅行記』第141回）に協力したかどで投獄されたと聞いて、再びネパールに入り、総理大臣チャンドラ・シャムシェル（1863-1929）に直訴して、ダライ・ラマへの釈明の上書の取り次ぎを依頼している。彼は自分の行動が疑獄事件に繋がったことに苦悩し、チベットの恩人たちの救出のために、できる限りのことを

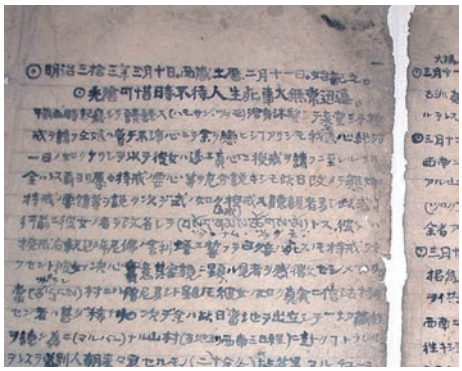


図 6　2004 年に発見された慧海の日記より 1900 年 3 月 10 日の日記の一部。（宮田恵美氏所蔵）

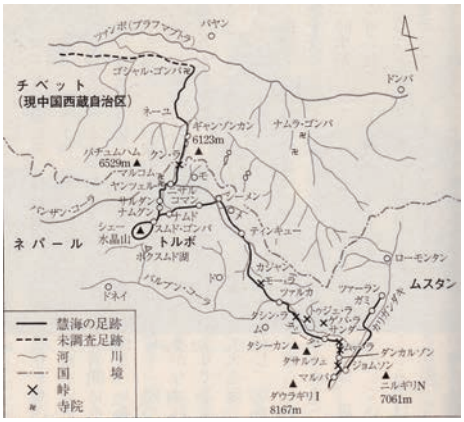



図 7　日記から判明した慧海の越境ルート。（奥山編 2007: 175）



図 12 写本チベット大蔵経カンギュルなどのチベット語仏典。ヤクの皮で梱包されている。（河口慧海編『美術資料　西蔵之部』美術工芸会、1917 年所収）



図 8　クン・ラのラプツェ（積石塚）。（大西保氏撮影）



図 9　クン・ラからのチベット側の眺め。慧海が「慧海池」「仁広池」と名づけた二つの池が見える。（大西保氏撮影）



図 10　カイラース山。（大西保氏撮影）



図 11　慧海が住んでいたセラ寺のペトゥク・カムツェン。

したのである。

ただし、慧海のこの行動が、この事件の解決に実際どれほど役立ったかははっきりしない。分かっていることは、1904年8月、フランシス・ヤングハズバンド（1863-1942）率いる英印武装使節団がラサに入城したことを契機に釈放された囚人の中に慧海関係者が2名いたことである。彼らの写真が、ギャンツェ駐在の英国通商代表フレデリック・オコナー（1870-1943）から、1905年にチベットを旅した浄土真宗大谷派の寺本婉雅（1872-1940）を通じて慧海に贈られた。現在それは東北大学大学院文学研究科が所蔵する河口コレクションの中に所在している（Cf. 奥山 2009: 303-308）。

## 第2回チベット旅行

1903（明治36）年5月20日、慧海は神戸港に上陸した。彼の旅行談を巡る新聞記者たちの取材合戦は、彼を一躍「時の人」にした。称賛も多かったが、新聞各紙を飾ったその旅行談が当時の日本人にはあまりにも奇想天外に感じられたこともあって、彼のチベット行そのものを疑い、彼を法螺吹き扱いする者も少なくなかった。だが当の慧海は、こうした毀誉褒貶をよそに、第2回旅行の準備に奔走していた。6年に及んだ第1回旅行は世界の探検史に残る快挙であった。しかし彼自身はこれに全く満足しておらず、チベット語・梵語の仏典の更なる収集に意欲を燃やしていた。殊に彼はチャンドラ・シャムシェルとの間で、漢文大蔵経とカトマンズ盆地のネワール人仏教徒が保持する梵語仏典写本との交換を約束していた。日本人として約束は守らなければならない。彼は財界人の支援を得て蔵梵仏典購求会を興した。この会は2万円を目標に寄付金を集めて、彼の次の旅を資金面で支えようとするものであった。

1904（明治37）年10月11日、慧海は再び旅立った。彼は漢文大蔵経（黄檗版）の他に、立臼、水車模型、唐箕、水揚げポンプなどを携えていた。それは前回の経験からインド・ネパールにはない利器を持参して、かの地の人々を利益したいという志から出た「明治の海外技術協力」と呼ぶべき美挙であった（奥山 2014b: 37-41）。惜しいことに、それらはボンベイ（現ムンバイ）の税関倉庫の火災のために大蔵経を除いて烏有に帰してしまったようであるが、無償の努力と先見性こそ評価されるべきであろう。

さて、カルカッタ（現コルカタ）に上陸した慧海は直ぐにでも入蔵するつもりでいた。ところが、チベットを巡る国際情勢の変動などから、彼はそれから実に9年以上もの間、インド・ネパールで過ごすことになる。その間にカトマンズ盆地で梵語仏典写本を収集し、ベナレスで梵語を習得し、インド・ネパールの仏跡（釈迦牟尼縁の聖地）を巡り、またラビンドラナート・タゴール（1861-1941）を始めとする多くの人士と交わった。

1914（大正3）年1月、シッキムを経て再入蔵。シガツェでチベット第2の大ラマ、パンチェン・ラマ9世（1883-1937）と交流し、ラサではダライ・ラマ13世に謁見して、チベット大蔵経を始めとする仏典類のみならず、仏像・仏画・仏具から装飾・工芸品、日用雑貨、植物・動物・鉱物標本に至るまで、様々な資料を幅広く大量に収集することができた。その中には後に「西蔵大蔵経問題」の原因となる写本チベット大蔵経カンギュルも含まれていた（図12と付録を参照のこと）。

## ウパーサカ仏教を提唱する

1915（大正4）年9月3日、慧海は第2回旅行を終えて神戸に帰着した。32歳で旅立った慧海は、この年50歳になっていた。2日後、彼は北旅籠町に帰り、肥下家を訪れて、徳十郎の霊前で読経した。慧海の18年にわたるチベット旅行時代を地元から支え続けた徳十郎は、慧海が帰国する僅か40数日前に50歳の若さで世を去っていたのである（奥山 2014ab）。

それからの慧海は、布教、講演、執筆などの活動のかたわら、自らが持ち帰った梵語・チベット語の仏典を精力的に研究して、釈迦牟尼の真実の教えを探究していった。同時に和訳一切蔵経を造るという宿願を果たすために、数多くの大乗仏典の和訳を世に送り出していった。翻訳助手となるチベット語の弟子の育成にも力を注いだ。そのために彼が財界人からどのような支援を受けたかについては、彼の弟子の一人を父に持つ藤本慶光による論考（藤本 2013）が参考になる。もちろん我が国のチベット学の草分けとしても重きをなした。先に述べた慧海の学者としての顔は、この時代一気に充実してゆく。

これに歩調を合わせるように、彼の宗教家としての顔も完成に近づいていった。その結論と言うべきものが、慧海独自の実践論であるウパーサカ（在家）仏教の提唱である。ウパーサカ仏教とは、在家の仏教信者（ウパーサカ、優婆塞）が、釈迦牟尼を本尊とし、在家の五戒（不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不飲酒の５つの戒）を守ることを基本とする大乗仏教の実践形態である。彼はかねてより日本の仏教界の腐敗沈滞ぶりに対して厳しい批判を持っており、ウパーサカ仏教の実践によって現代仏教を大改革しようとしたのであった。そのために彼は、還暦を機に還俗を断行し、在家仏教修行団を率いてウパーサカ仏教の運動に邁進していった。彼が提起した問題は、これからの仏教がいかにあるべきかを考える上でも示唆に富んでいる。

慧海が没したのは、太平洋戦争の終結を半年後に控えた1945（昭和20）年２月24日のことであった。享年80歳。日本近代史の激動の中で、釈迦牟尼に対する信仰と自己の信念とに忠実に生きた生涯であった。その生き方、とりわけ、真理を求めて未知の大地に挑んだ若き日の姿は、今日ますますロマンの輝きを強め、私たちを魅了して止むことがない。

## 付録　河口半瑞宛河口慧海書簡

以下に掲げるのは、河口慧海が弟河口半瑞に宛てて書いた書簡の翻刻文である。原文は縦180 mm、横2150 mmの和紙の巻紙に縦書きで墨書されている。日付は７月９日とあるのみであるが、内容から1918（大正７）年の手紙と判断される。

本書簡は、東京の慧海から当時大阪にいた半瑞に送られたものと推定される。その内容は、所謂「西蔵大蔵経問題」、一名「大正の玉手箱事件」に関連している。1917年に勃発したこの問題は、第２回チベット旅行中に慧海がダライ・ラマ13世から託された写本チベット大蔵経カンギュル（東洋文庫現蔵）の宛先を巡り、それを東京帝国大学宛とする慧海の主張と、浄土真宗大谷派第22世宗主大谷光瑞（1876-1948）宛とする同派のチベット留学生青木文教（1886-1956）の主張が鋭く対立したというものである（その経緯については、奥山2009, 2011を、また本書簡に関連して、棚瀬2010, 2013: 253-259を参照のこと）。本書簡は、英印政庁、駐日英国大使館を通じて、チベット政府から書簡を受け取った慧海が、半瑞に今後の対策を相談したものであり、腹蔵なく語り合える肉親に対して、彼がこの問題をどう見ているかを吐露した資料として重要である。

本書簡は種智院大学名誉教授、北村太道先生のご所蔵にかかるものである。今回このような形で公表できるのは、ひとえに北村先生のご理解の賜物であり、衷心より謝意を表したい。北村先生はこの他にもチベット政府から慧海が受け取ったチベット文書簡２通を所蔵されている。それらについても今後順次発表してゆく予定である。

なお本書簡は、1993年に堺市博物館で開催された「秋季特別展　河口慧海―仏教の原点を求めた人―」に出陳され、その図録に写真版（堺市博物館編 1993: 23）が収録されている。

本文中の2, 7, 98-99行目の「ダライ（、）ラマ」はダライ・ラマ13世、８行目の「チーキヤブ、ケンボ」はチベット政府の僧部大臣（法務総監）テーカンワ・チャムパ・トゥプワン（?-1922）、67, 71行目の「多田」は青木と同じ本願寺派のチベット留学生多田等観（1890-1967）を指している。

翻刻に当たり、漢字は新漢字を、仮名は現行のものを用いた。仮名遣い、送り仮名は原文のままとした。各行の冒頭に付した数字は行番号である。■は塗り潰しを示す。

1　啓　只今英国大使館より今般
2　ダライ、ラマより貴下宛書翰を
3　通印度政庁官吏の手を経て
4　送付有之ニ付同封転送致し候間
5　御査収被下度との添書にて西蔵文書状
6　到着開見するに不審ニも
7　ダライラマよりの書状ニても
8　なけれバチーキヤブ、ケンボ即ち
9　僧部大臣よりの書状ニても無
10　之只西蔵政府の印を捺さる
11　のみニて発書者の誰なるかゞ不
12　明のもの到着、依て大に不審
13　して一読致し候処其云ふ処
14　は余か法王に対して東帝大の為
15　ニ上書せし儀ニ付てハ少しも誌
16　さずして曰く余がラハサニ在りし時
17　自己の為めならず日本国家の為めに蔵

経を乞ふと願ひ出でしを以て
之れを与ふるに当て兼て度々
日本仏教の教主たる大谷法主より
蔵経を乞ふ旨願ひ出でありしを
以て一小箱中法主に蔵経を送る
旨の書状と小仏像とを収めて
之れを足下に托せりされバ日
本国家の為め国家仏教の
教主たる大谷法主に写本蔵
経を渡されなバ云ふべきこと
なく教界の為ニも好しからんと
大略右様ニ誌し居り候
右に付今後の方針として
　外、西蔵ニ対しては
一　英国大使館を通じて
　　再び書状を送る事
二　書状之主意ハ（前ニ法
　　王ニ願ひし大使館を経た
　　る書状を添書とし■此度
　　の返書をも添書として）本
　　来東帝大へ贈らるゝ様の前
　　記の願書ニ依て受けしものな
　　れバ其の如く東帝大ニ送り已
　　ニ其領収書も差上げしを
　　又余かラハサに在りし時ハ
　　一言も余が■法王より受
　　けし蔵経ニ付て大谷氏へ
　　贈るなどのことは毫も聞かざ
　　りしを然るに此度の返書
　　ニ依れバ大谷氏ニ渡すか宜
　　しからんとのことなれども此
　　書状ハ法王猊下の玉璽も
　　なけれバ御名もなく又其
　　政府の名及大臣の名も
　　なけれバ無論法王猊下の
　　意志と存ぜず　されバ其
　　始め願ひ出でし願書ニ
　　基き法王猊下直接の
　　裁断あつて猊下の御名真印
　　ある裁書を賜ハらんことを
大略右様の書状を送らん
と考へ居り候　猶ホ細審の
思慮を廻らし候上、書状
を作らんと存じ候
次に内、吾国の社界ニ対してハ
前記の理由を附し西蔵よ
りの書を訳して公開せんと
考へ居り候其次第ハ多分
右之如き返書ハ　ラハサなる
多田をして十分運動せしめた
る結果、曖昧不明の発送者
なき書面を送らしめしこと
と推察致し候　然る時ハ本書之
写しハ多田より大谷へ廻ハり居る
ならんか　此点よりすれバ当方より
発表するハ好ろしからんとも思ハれ候
併し一点退いて考ふるに幽霊
の如き書の内容を訳して公けに知ら
しむる必要なく此事を十分正し
て後ニ発表するも可ならんか
此点何れか得策なるか一寸決
し兼ね候
併し西蔵より之書の内容ハ
大分にくどくどしく誌し居
りて具眼者ハ余かラハサ府
ニ在りたる時全く大谷氏へ
蔵経を送るなどのことは交
渉を受け居らざりしこと明
瞭なるものあり　仮りに是れ
を西蔵政府の真書とするも
此書ニ依て彼等か余を欺きし
こと明かなるものあれバ余か良
心に於て政府の真命なりとす
るも詐欺ニ対してハ当方より
責任をもつ必要なしと存
じ候ニ付一切発表して将来
西蔵政府か欺ける真状
を今より伏線的に明確に
致しおくか最も上策かと存じ候
不取敢西蔵文の訳ニかゝり可申候
猶ホ英国大使へハ礼状とダ
ライ、ラマよりの書状なかりしこと
丈を誌し送書致すべく候
病気は大に好しく痛みも
少しに相成り此様子ならバ四
五日の中ニ離床可致と存じ候
乍末筆此間ハ米子よりも
尋ね被下喜び居る旨伝へ被下度先は

106 不取敢要件まで如是候
107　七月九日夜　　慧海
108　　半 瑞 殿
109 附言　訳書発書ニ付足下
110 賛否の意見を電報ニて
111 一報を乞ふ、送金被下度候

## 参考文献

奥山直司 2009（2003）『評伝　河口慧海』中央公論新社
奥山直司 2011「青木文教と河口慧海―『西蔵大蔵経問題』」、白須淨眞編『大谷光瑞と国際政治社会―チベット、探検隊、辛亥革命』勉誠出版、pp.129-159
奥山直司 2014a「河口慧海を支えた人々―堺の篤志家・肥下徳十郎を中心に―」、『フォーラム堺学』20: 5-36
奥山直司 2014b「河口慧海の手紙―肥下徳十郎他宛―」、『堺研究』36: 1-54
河口慧海著、奥山直司編 2007『河口慧海日記―ヒマラヤ・チベットの旅―』（講談社学術文庫）、講談社
河口慧海研究プロジェクト 2007「河口慧海の道」、『季刊　民族学』119: 3-49
堺市博物館編 1993『秋季特別展　河口慧海―仏教の原点を求めた人―』堺市博物館
棚瀬慈郎 2010「旧 India Office 所蔵　チベット関連ファイルの中の『大正の玉手箱事件』関連史料について」、『チベット文化研究会報』34-1: 28-25
棚瀬慈郎 2013『旅とチベットと僕―あるいはシャンバラ国の実在について―』講談社
藤本慶光 2013「河口慧海を支えた財界人とその時代」、『山岳』108: 87-108

## Summary

## Japanese and Tibet: On the Journeys to Tibet by Kawaguchi Ekai

Naoji Okuyama

Koyasan University

In the nineteenth century Tibet, wary of other countries, especially Great Britain, closed its borders and placed strict restrictions on the entry of foreigners. For this reason little was known in the outside world about conditions inside Tibet and the interest of explorers, adventurers, scholars, surveyors and also religious figures and dreamers was therefore drawn all the more strongly to Tibet. In late nineteenth-century Japan this interest manifested itself in the form of a “Tibet fever” among Buddhists. The first Japanese to reach the Forbidden City of Lhasa was Kawaguchi Ekai(1866-1945) , a Buddhist monk of the Ōbaku tradition. His aim was to study Tibetan and Sanskrit and to collect Buddhist scriptures written in these languages with a view to producing a readable and accurate Japanese translation of the Buddhist canon and thereby clarify the true teachings of the Buddha Śākyamuni. In this paper the author gives an outline mainly on Kawaguchi’s journeys to India, Nepal and Tibet in his life and appends a letter from Kawaguchi to his brother, Hanzui which is closely connected with the dispute known as the “Tibetan Tripiṭaka affair”.